

# 研究ノート

## 「海外ビジネス研究」の教育効果

山 崎 克 雄

平成23年度前期より授業科目として「海外ビジネス研究」が新設された。当学部では平成17年度より、「アメリカスポーツ研修」というプログラムが開始され、応募学生数に影響を受ける不定期開催であったが、平成22年度より通常授業科目として確立された。現地研修に参加した学生に2単位を授与するもので、平成23年度より「海外スポーツ研究」という科目名に改称された。

平成22年度に入り、当大学には「経営学部」にして「経営学科」があるので、スポーツのみならず、経営（ビジネス）に関連する海外研修があって然るべきではないかとのことで、経営研究所長を中心に検討が重ねられた。同年度秋のカリキュラム委員会において、正式な経営専門選択科目として、翌23年度前期開講が決定した。今年度はタイ国訪問による海外ビジネス研究として実施したが、本稿は履修ガイダンス時の説明資料作成までの経過、講義目標とテーマ、講義内容と進め方、国内の同種プログラムの紹介、本科目の教育効果に関する研究報告である。

### 1. 履修ガイダンス時の説明資料作成までの経過

関係者間の基本構想として、① 毎年実施し、継続性のある単位認定科目とする② 訪問国は特定しない③ 旅費交通費は参加学生負担、という骨子が掲げられ、細部は科目担当教員に一任することになった。教員は当科目に関連する「国際経営論A/B」を担当しており、22年度の同科目の履修生数名に訪問国と費用について小当たりしたところ、訪問国は近隣を好まず、費用は15万円程度におさまることを希望する意見であった。一方、教員が引率するにあたり、危機管理ができるか否かも含め、訪問国に対してそれなりに精通

している国が望ましく、また訪問企業に関しても簡単には受け入れてもらえない事をも想定し、多少なりとも面識のある人物が訪問企業にいることを考慮した。

平成23年度前期開講を実現させるためには、実施時に多少の変更があったとしても、2月に開催される履修ガイダンス時には、大まかな募集説明ができる内容に仕上げる必要があった。幸い、担当の専門ゼミ生の中に積極的な参加希望者が1名おり、彼と意見交換するなかで、教員が平成20年2月下旬より1ヶ月間、所属するロータリークラブの関連で青年4名を引率して滞在したタイに決定した。同国に決めた他の2つの理由は、アジアの中では中国に次いで日本企業の投資件数が多く、1,647件（東洋経済新報社『海外進出企業総覧—2010年』調査）にのぼっていること、また平成22年12月に非常事態宣言が8ヶ月半ぶりに解除されたことも決め手となった。

その上で、9月上旬の4泊6日及び5泊7日のケースで、参加人数が2～3名、4～10名、11～22名の場合のホテル代、現地での朝夕食代、移動用専用車両代込みの見積りを旅行代理店に依頼した。その結果、参加人数の多少を問わず4泊6日で、ほぼ15万円に収まる「ご旅行見積書」を提示されたので、履修ガイダンスでは「参加者が8名から10名を想定すると4泊6日で145,000円程度」と説明した。また訪問企業に関しては、ミネベア、ヤマハ発動機、古河電工などのメーカーに加え、デパートの伊勢丹や近年、タイへ進出を果たしている飲食チェーン店などの見学も計画していると述べた。

### 2. 講義目標とテーマ

第1週（4月11日）の講義には12名の履修希望者が出席した。配布したシラバスの「講

義目標とテーマ」には次のように記した。

国際経済社会の中で注目されているアジア諸国を対象地域にしぼり、進出企業の訪問を通して国際経営学を研究する。特にアジアで活躍する企業に関して、日本と現地を訪問してその経営手法を比較し、その企業のグローバル戦略を学ぶ。アジアビジネス研修の初年度として、タイにある日系企業を訪問する。日本とタイ（泰）における同一企業内での経営の違いを学ぶこと、また両国の文化が経営に及ぼす影響について考察する。

上記目標とテーマは4科目①「企業のグローバル戦略」、②「タイ経済と経営事情」、③「国の文化と現地経営」、④「フィールド・スタディ（日泰）」相当分に値し、16週では明らかに時間が足りず、どの科目の要素も不満足となって、納得のいく講義が出来ないことが予想された。

第1週講義時に、「本科目は全学年を対象とするが、現地研修が単位取得の条件である」旨を強調したところ、第2週目には履修者が9名に減少した。就職が決定していない4年生や渡航資金が準備できそうもない学生がとりやめた模様である。9名であれば、教員による個別指導も行き届くので、ゼミナール形式により、上記④の「フィールド・スタディ（日泰）」科目と位置づけ、①、②、③の科目に関連する事項は、日本及びタイでの企業訪問時に、企業側の説明を乞うことにした。また説明のない時には、履修生がそれらの事項に関して質問するよう指導した。

フィールド・スタディに集約することにより、国内外で企業訪問を効率的に実施し、訪問企業での滞在時間を出来る限り長くして、学生の体験とそこから導きだされる演繹的な結論を重視する狙いが可能となる。更に地域研究の学習のみならず、社会的なコミュニケーション能力を磨くことにも注力した。まず日本での企業訪問では、適切な挨拶や企業側の説明に対して必ず質問ができるように訓練をする。また国際ビジネスにおける共通語（リングフランカ）は英語であり、タイのビジネス界でも英語で十分に通用することを認識させるために、現地企業において英語での質疑

応答や食堂などで現地人との対話時間を設けてもらうように要請した。少なくとも英語に対するアレルギーをなくし、英語が国際コミュニケーションを図る上での重要なツールであることを、体得させることに主眼をおき、後述するように、現地では全員が英語表現せざるを得ない環境作りを設定した。

当学部に入學する学生の多くは、英語を受験科目にしていないこともあり、中学2年生レベルの域を出ないという事実は、毎年担当する基礎ゼミナール（1年生を対象とした必修科目）から認識していたが、個々の実力を把握してもらう意味でTOEIC Bridgeを実施した。これにより英語学習意欲の向上に弾みを付けて現地に臨み、帰国後に再度、同一方式の異なる問題により、その成果を測ることにした。

### 3. 講義内容と進め方

最初の週に配布したシラバスには次のように記した。

今回の訪問予定は、下記のタイ国の関連企業と大型商業施設である。

(1)モルテン（スポーツ関連産業） (2)ミネベア（電子部品産業） (3)古河電工（情報通信産業） (4)伊勢丹（小売業） (5)壱番屋（カレーハウス・飲食） (6)ヤマハ発動機（輸送機械産業）

したがって、国内の上記企業の関連事業所も合わせ訪問する。また、タイの「バンコク警察」「タイ式マッサージのチェーン店」など、履修者の希望・意見を聞いて決める。

上記企業の内、モルテンに関しては訪問先から除外した。同社の二大事業はスポーツ用ボール製造と工業部品用ゴム製品事業であるが、前者は国内製造をとりやめ、タイに生産が集中していたので、二国間の工場経営の比較が出来ないと判断した。更に3月11日発生の東日本大震災で同社の東北オペレーションが打撃を受け、全社あげて再興に努めているので、どの部署においても当分、外部の受け入れを見合わせたいという同社長の意向があった。

4月開講以前には柔道部所属で警察官志望

という学生が履修する可能性があったので、バンコク警察も予定したが、海外研修への参加申し込みがなかったため除外した。タイ式マッサージは研究対象として希望する学生がいなかったため、観光の一つとして各人で楽しんでもらうこととした。

第2章で述べたように、講義目標が「ワールド・スタディ」に重点移行し、国際コミュニケーション力の向上というテーマの遂行になったため、バンコク大学国際学部訪問とバンコク・クロングトイ・ロータリークラブの例会出席を企画した。前者は担当教員が2008年に訪問し、ドーン学部長（現在は副学長）と面識があったため追加したところ、依頼後直ちに了解がとれた。後者は同様に2008年時の知己を活かし、毎週1回の例会で、個々の学生が英語を用いて自己紹介をするという場の設定をお願いし、受諾された。

観光には研修最終日をあて、代表的な水上マーケット（ダムヌンサドゥアック）、王宮公園、横たわる大仏などを見学し、文化の理解を深めることとした。幸い、観光費用はトラベルエージェントとの契約総額131,500円/人の中に含まれていたため、時間の許す限り自由に選択できた。

授業科目は16週より構成される原則に則り、下記のように組み替えて実施した。

第1週から4週までは、教員がパワーポイントの使用によるタイ文化の説明、プリントを配布してタイ国の政治・経済に関する一般知識の解説、訪問企業の簡単な紹介および講義目標、テーマと日程を説明した。第5週は工業グループ4名と商業グループ5名に分かれて夫々にリーダーを決め、自学自習するための具体的なテーマを話し合っただけで指示し、教員はその後、ファシリテーターに徹した。9名全員が同一行動をするわけであるが、企業訪問時に積極的に質問するグループとして、メーカーの場合は工業グループ、伊勢丹、壱番屋の場合は商業グループに分け、自覚を持たせる指導をした。当初の計画では第10週までに国内企業訪問を終え、第11週に再度グループごとにわかれ、訪問成果と現地訪問時の見学のポイントを話し合うことにし

ていたが、一部の企業側の都合で延期され、完璧な実施には到らなかった。第12週はタイ語研修を予定していたが、タイ人との日程調整がつかず、挨拶などの簡単なタイ語のプリントを配布するにとどめた。同日、トラベルエージェントに代金回収をしてもらい、その後にはTOEIC Bridgeのテストを実施した。第13週、第14週は現地研修に振替、第15週は詳細スケジュールと課題の確認を行い、第16週はレポート提出に代替した。

現地訪問日程の最終版は下記の通り。

- 9月4日(日)：中部空港に集合し、バンコク着、  
バイヨーク・スイート・ホテル宿泊
- 9月5日：午前 古河電工関連企業訪問、  
午後 ミネベア関連企業訪問
- 9月6日：午前 ヤマハ発動機関連企業訪問、  
午後 バンコク大学国際学部訪問  
夕食時にバンコク・クロングトイ・ロータリークラブ訪問
- 9月7日：午前 タイ伊勢丹、午後 CoCo  
壱番屋セントラルワールド店訪問
- 9月8日：終日観光し、市内レストランで夕食後空港へ向かい、深夜便に乗りこむ
- 9月9日(金)：早朝中部空港に到着し、解散  
上記全行程を無事修了。

#### 4. 国内における同種プログラムの紹介

財団法人全国修学旅行研修協会<sup>1)</sup>による平成20年度の実施状況によると、海外研修は学校が主催する語学研修、ホームステイ、実習、姉妹校交流などで実施されている。3ヶ月未満の海外研修は合計971校、旅行件数1,319件であった。<sup>2)</sup> 但しこの数値は大半が高等学校であり、大学（短大を含む）に関する明確な資料は見当たらないが、約220校と推定される。近隣の例では、当大学と単位互換協定を結んでいる静岡県立農林大学校がある。科目

1) 平成23年10月2日現在、同一の財団法人の協会は存在せず、公益財団法人 全国修学旅行研修協会に移管されたものである。

2) 松村智恵「大学生の海外研修旅行におけるワークショップの実践と評価」日本教育工学会研究報告集, JSET10-5, 2010年

名「海外農業事情」(1単位)<sup>3)</sup>として1年生を対象に募集をし、オランダへ10日間(例年10月中旬)、教員が引率する。今年度は8名が参加し、10月9日より18日までであり、現地研修前の講義は3回実施される。<sup>4)</sup> 宿泊は一部ホテルもあるが、大半はホームステイをしながら、工業化された先進的花卉栽培技術を学ぶことになる。本人負担は28万円で、科目実施にあたっては静岡県からの補助がなされている模様である。

本格的な海外インターンシップは独立行政法人・国立高等専門学校機構が平成20年度より毎年2回実施しており、国際的に活躍できる技術者の育成を目的とした産学協働の共同教育事業である。同機構発行の報告書<sup>5)</sup>から概要を記述する。

①研修国と派遣人員( )内数値:

トルコ(3)、インドネシア(2)、タイ3企業(9)、フィリピン(3)、マレーシア(1)、スイス(3)

②期間と本人負担額: 3週間で4万円~10万円の見込み

③選抜方法: 51校ある国立高等専門学校の校長が2名まで推薦できる

④申請資格: (a)国立高等専門学校専攻科の在学学生、または国立高等専門学校第5学年の在学学生で、翌年度に専攻科への入学が確実な者

(b)TOEIC400点以上、英検2級以上、工業英検2級以上、これに準ずる資格を有する者

⑤単位認定: 夏休み、冬休み、春休みに実施されるため単位認定はないが、卒業論文などに生かされる。事前研修は2日間、東京で行われる。

上記タイの一企業は「海外ビジネス研究」で訪問したThai Yamaha Motor Co., Ltd. である。現場を体験した学生のレポートを読む限りでは、技術習得はもとより海外勤務の際の要諦までも体得している。また専門的かつ学際的な更なる知識習得の必要性を痛感している。申請資格に合致したもののばかりであるので、現地でのコミュニケーションに関しては、「伝達しようとする強い意志や熱意があり、それらが相手側に伝わりさえすれば、コミュニケーションは成立する」と結んでいる。

明治大学経営学部では学部生を対象に「フィールド・スタディ」という科目を設けており、内容は各教員に一任している。大半は国内の企業を1日訪問する程度で、残りは自分の専門分野の講義をする。海外に学生を引率する教員は少ないが、郭燕書教授はゼミ生に中国人留学生がいることもあり、毎年十数名(ゼミ以外の学生を含む)を引率し、中国研修を実施している。院生と合同の年もあるが、ソニー製品のOEM部品供給メーカーに1週間滞在し、工場内でインタビューすることを通して学生に国際経営、特に組織論を実地指導している。これは海外における社会科学のフィールド・スタディとして参考になる。

広島経済大学は1学部、1キャンパス、2,000人余の学生数である。国際地域経済学科があり、選択専門科目として、国内・海外インターンシップ(正式には、国際地域経済特別演習Ⅰ・Ⅱ)プログラムを平成13年度から有している。鈴木文三教授(元インターンシップ推進室長)の論文<sup>6)</sup>と同大学の海外インターンシップに関する著書<sup>7)</sup>のある永田智章教授との十数回に亘るメール交信に基づいてまとめたものを報告する。

①募集方法: 2年生の時に国内インターン

3) 同校では前期・後期で夫々異なる科目の授業を実施しているが、ほとんど1単位である。

4) <http://www6.shizuokanet.ne.jp/usr/noudai/> (平成23年9月20日検索)と参加学生の報告よりまとめた。

5) 国立高等専門学校機構『平成22年度海外インターンシッププログラム報告書』平成23年9月発行

6) 鈴木文三「広島経済大学におけるインターンシップへの取組~海外インターンシップを中心として~」『インターンシップ特集論文集』地域科学研究会高等教育情報センター(2005年)

7) 永田智章『ベトナムで学んだ経済学—経済学を学ぶ女子学生ふたりの海外インターンシップ体験記』広島経済大学インターンシップ推進室(2004年)

シップを受け、3年生で海外インターンシップを希望する学生と、希望国や興味のある企業、研修に寄せる期待や課題について相談し、納得の上で4月に履修し、事前学習（前期授業）がスタートする。従って現地に出掛けることが単位認定の前提になっている。年間4単位。

②海外研修期間：約4週間（受け入れ先事情により多少のばらつき有り）

③研修先：上記①の理由と受け入れ先事情により、国、企業とも毎年流動的な状況

④費用負担：距離に関係なく学生本人が53%、大学が47%

費用には交通費（飛行機及び国内の電車料金など）、海外保険、宿泊費、現地

での通勤費、その他研修に必要な諸雑費を予め算出した総額が含まれる。

例：シンガポール研修の費用総額—2010年度は約149,000円

⑤事前の語学研修：海外インターンシップ参加者を対象とした「実践英語Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」という専門科目が用意されてはいるが、海外インターンシップの必修科目ではない。これらの科目は週3コマ通年、1年次～3年次配当の長い時間を掛ける科目である。英語以外（中国語、実践タイ語・実践インドネシア語等）については推奨はするが、履修条件にはしていない。

⑥平成13年から平成22年までの実績

# 特別演習Ⅱ・企業インターンシップ（海外）研修先別履修者数実績一覧

広島経済大学 提供

国	2002年 (H14)	2003年 (H15)	2004年 (H16)	2005年 (H17)	2006年 (H18)	2007年 (H19)	2008年 (H20)	2009年 (H21)	2010年 (H22)	2011年 (H23)
ベトナム		2(2)	3(1)	3						
タイ				2						
オーストラリア	2(2)	2(2)	2	2(2)						
中国	3(1)	6	2	1	2					
シンガポール		1	1		1	2	2		2	1
シンガポール	2(2)	2	2		2(2)	2(2)	3(3)	1	1(1)	1(1)
オーストラリア (パース)	2(2)	2								
ニュージーランド	2(1)	3								
インドネシア	1									
台湾	1									
米国(ミシガン)	2(1)	2								
米国(ホノルル)					2(2)	1	3(3)	3	2(2)	3(3)
米国(ラスベガス)					1	2(2)	4(2)	3(2)	3	
オーストラリア (シドニー)									2(2)	1(1)
合計	15(9)	20(4)	10(1)	8(2)	8(4)	7(4)	12(7)	7(2)	10(5)	6(5)

( ) 内は女子学生数



## 5. 「海外ビジネス研究」の教育効果

まずは国際コミュニケーション力の観点から教育効果を考察する。バンコク大学国際学部を訪問した際、学生が運営する喫茶店でショーン・ブエナヴェンチュラ氏（同学部講師兼学務・留学生アドバイザー）によって9名の学生たちとの活発な対話がなされ、非常に効果的であった。また前述のロータリークラブでの会合においては、6月27日のTOEIC Bridgeで最高点の学生が、当大学のパンフレットを利用して学部紹介をした。その後、一人ずつ立ち、英語で自己紹介と夕食のお礼を述べた。例会の司会者から簡単な質問などもあり、国際コミュニケーション力の育成に有効的であったと考えている。

TOEIC BridgeはTOEICの入門編と位置づけられており、テスト構成も同じである。TOEICは「英語のコミュニケーション能力を幅広く評価する」テスト<sup>8)</sup>であると考えられるので、第3章で述べたようにTOEIC Bridgeをタイ訪問の前後に実施した。全員、TOEICは受験したことがなく、実用英語技能検定（英検）の方に馴染みがあった。従って質問票により、英検の級を取得しているものはそれを明記し、ない者に関しては問診による類推の級を判定し記入した。

帰国後のテストにおいて、出発前のテスト比で上昇した学生5人、下落が4人という結果となり、定量的な向上に関する判断は難しい。また英検とTOEIC Bridgeの得点との相関関係は見られなかったものの、定性的には現地研修が英語を学習するモチベーションアップに繋がると、引率中のごたえにより実感している。

フィールド・スタディとしての教育効果に関しては、教員の観察評価のみならず、期末レポート（第16週相当）提出を求めたので、これにより推定する。レポートは下記のように指示した。

課題：「タイ研修を含むこの授業科目は自分にどのような影響を与えたか」

本文はA4 一枚 ワードで1,600字以内（添付資料で枚数が増えることは可）

9月30日(金)までに提出のこと。

レポートの評価は「気づき」（内省的効果）、「将来指向」（積極的効果）、「観察力」（分析力効果）、「日本語能力」（誤字、脱字及び文章力）の四つの視点で評価した。採点結果は下記の通りである。（5段階評価）

TOEIC Bridgeのテスト結果

	英検	リスニング (50点満点)		リーディング (30点満点)		合計 (80点満点)		改善 点数
		6/27	9/19	6/27	9/19	6/27	9/19	
学生A	3級	39	38	14	19	53	57	4
学生B	3級	23	34	13	11	36	45	9
学生C	N/A	34	37	19	23	53	60	3
学生D	N/A	33	31	20	7	53	38	-15
学生E	3級	25	25	20	11	45	36	-9
学生F	4級	24	26	11	8	35	34	-1
学生G	準2級	41	44	18	21	59	65	6
学生H	3級	37	43	21	26	58	69	11
学生I	3級	33	25	18	15	51	40	-11

注：リスニングは3部構成の合計点

8) 須部宗生・河合亜弥子「TOEICの特性と可能性—教育現場での活用—」静岡産業大学『環境と経営』第15巻第2号（2009年）、P29

	気づき	将来指向	観察力	日本語能力	合計
学生A	5	5	5	5	20
学生B	4	4	5	4	17
学生C	3	3	4	3	13
学生D	3	3	3	3	12
学生E	4	3	3	4	14
学生F	3	3	4	4	14
学生G	3	3	4	4	14
学生H	5	4	5	4	18
学生I	5	4	4	4	17

予想はしていたが、レポートとTOEIC Bridge評価のトップは異なる学生であった。しかしTOEIC Bridgeの1位はレポートでも2位であり、国際コミュニケーション力が高いことが、現地での吸収力も高くなることを裏付ける結果であると言えよう。

タイでの企業訪問当日のホテルやバスの移動時間を活用し、各グループのリーダーが日本での企業訪問結果を踏まえて、見学のポイントを語った。これにより第2章で述べた「企業のグローバル戦略」や「国の文化と現地経営」の側面に、若干光を当てる狙いがあった。しかしレポートを読む限り、国内での企業訪問効果はほとんど見られなかった。来年以降の課題として、「（海外での）フィールド・スタディ」を講義目標に掲げるのであれば、費用対効果の観点で、国内企業訪問は1～2社に留め、事前にホームページなどで学生に企業調査を行なわせ、明確な課題や確固たる目的意識を持たせ、その上で海外研修に臨ませてはどうかと考えている。